

伊勢田塚陶棺発掘調査報告書

# 伊勢田塚陶棺発掘調査報告書

1 9 7 3

伊 勢 田 塚 調 査 会

## 序 文

埋蔵文化財は、民族文化の遺産であると共に、地域文化の歴史を物語る資料である。そしてその遺物・遺跡の研究は、日本の歴史に大きく裨益するところのものである。ことに今回の伊勢田塚の発掘調査によって明かになった遺物の陶棺は、宇治市においては初めてのものであり、考古学上も極めて珍しいものであるといわれる。その故にこの貴重な遺物を保存し、研究の資料として後世に継承することは現在のわれわれに課せられた重要な課題であると思う。

今回の発掘調査も地域開発の一端の事業のために緊急を要し、短日月で実施しなければならなかったが、潰滅の危機を救い一応の所期の目的を達したことは同慶のいたりである。

古老の伝える「伊勢田の歴史は千年の昔から」という言葉を明かに裏づけることになり、ふるさとという言葉の空虚さに重み加わり、地域社会の文化の本質をひしひしと感じさせ、ふるさとを思う心にすがすがしさをもったのである。

本調査のために調査会が発足し、この調査会のために全面的に物心両面の協力をいたゞいた宇治市及び市教委の各位、ならびに伊勢田史友会に深甚の謝意を表すると共に、さらにこの遺跡の発掘調査に多忙な公務のかたわら調査担当者として現場に出むいて指導し、さらに遺物の整理・復原、そして報告書をまとめていたゞいた日本考古学協会会員の山田良三先生および史友会顧問の北川純三先生ならびに西宇治中学校中津川敬朗先生、また終始現場において実測図作成にあたっていたゞいた花園大学史学科学生増田一裕君、さらに城南高校地歴部・西宇治中学郷土研究部・伊勢田史友会の各位の努力に対し、こゝにあらためてその労を多とするものである。

おわりに、なお本書が学会のため裨益するところがあれば幸である。

昭和48年1月5日

伊勢田塚発掘調査会長

伊勢田史友会会長 向 井 正 存

## はじめに

今回調査された伊勢田塚は、台地上に位置し、北には巨椋池が横たわる。西には伊勢田の集落をへて、広々とした水田が続く。当時は巨椋池の伸縮がもたらす影響で収穫量は不安定であったろうが、耕作に適した自然条件に恵まれて人々の生活は豊かだったと想像される。すぐれた自然をたたえ、平和な暮らしを喜ぶことを日々のいきがいとし、死者に対しては厚く葬むるならわしだったのであろう。

近時、10年程前から全国的に埋蔵文化財の保護がさげばれているとは言え、この間にもいたるところで造成や開発工事がすすみ大規模な遺跡破壊をもたらした。市町村の教育委員会はこの問題を憂慮し、解決に奔走するものの十分な調査もなされぬまま多くの遺跡を失っていった。

宇治市も急激な都市化により、茶園や水田の多くが住宅地に変えられた。市財政は学校建設や公共事業に多額の支出を余儀なくされ、極度に窮迫している。こうした状態は国の高度経済成長政策の結果、大都市周辺の地理的条件によって生みだされたものであろう。

多くの文化財を有する宇治市でも浄妙寺跡・二子山古墳の調査を経験したが、今後も文化財保護行政はむづかしい状況の中でなおかつ進めなければならない。埋蔵文化財は、工事中において発見されることが多い。復元された陶棺を見ると、地主である松井一夫氏の早い発見がなければ、これ程完全に残らなかっただろうと無量の感がある。

短期間の調査ではあったが、多くの人々の協力と指導をいただいた。伊勢田史友会の向井正存会長をはじめとした会員の諸氏、地主の松井一夫氏、調査担当の城南高校山田良三教諭、西宇治中学校中津川敬朗教諭、花園大学生増田一裕氏と、作業に従事した城南高校地歴部、西宇治中学校郷土研究部のメンバー。

真夏の太陽のもとで作業することは並大抵のことではない。復元は城南高校地歴部とポーマン美術装飾株式会社にお願ひし見事に復元いただいた。ここに敬意と感謝の意を表する次第である。保管にあたっては、市に適切な施設が

なく来迎寺のご厚意でお預りいただいた。市文化財に指定し、永く保存するものである。この報告書の刊行で、伊勢田塚陶棺が郷土史の資料としてだけでなく、考古学の研究に広く活用されることを望む次第である。

昭和48年1月

宇治市教育長

北 島 勇

## 例 言

1. 本報告書は、伊勢田塚の発掘調査報告書である。
2. 出土遺物の陶棺は城南高等学校地歴部で整理復原し、仕上げはボーマン美術装飾株式会社宇治工場で樹脂加工してもらった。
3. 本報告書に使用した実測図は花園大学史学科学生増田一裕君が実測し、山田良三が製図した。
4. 調査報告は山田良三が執筆し、陶棺の歴史的背景については北川純三が執筆した。
5. 伊勢田塚出土の陶棺は宇治市指定文化財となり、保管は伊勢田史友会で行なっている。

## 目 次

### 伊勢田塚調査報告

(1) 第一章 位置と環境	…………… (山田良三)	1
(2) 第二章 調査経過	…………… (山田良三)	3
	調査日誌	…………… (山田良三) 5
(4) 第三章 遺跡と出土遺物	…………… (山田良三)	8
(5) 第四章 総括	…………… (山田良三)	10
(6) 陶棺の歴史的背景	…………… (北川純三)	20
庵寺山古墳実測調査	…………… (城南高校地歴部)	24

### 挿図，図版

Map 1. 遺跡位置図	……………	1
Fig 2. 地形実測図	……………	13
" 3. 主体部	"	…………… 14
" 4. 墓底	"	…………… 15
" 5. 陶棺	"	…………… 16
" 6. 伊勢田町中山出土の須恵器実測図	……………	17
	伊勢田町若林出土の須恵器実測図	…………… 17
" 7. 庵寺山古墳墳丘実測図	……………	27~28
PL 1. 遺跡全景	……………	18
	2. 陶棺出土状況	…………… 18
	3. 陶棺と棺台	…………… 19
	4. 陶棺	…………… 19

## 第一章 位置と環境

所在地 京都府宇治市開町九番地

近鉄京都線伊勢田駅付近は国道24号線を中心に国鉄奈良線、近鉄京都線が南北に平行して通っている。国道24号線は伊勢田の南で旧奈良街道と分岐する。この分岐点の東側の国道と国鉄奈良線の間には遺跡は立地している。

### 考古学上の環境

現在知られる宇治市南部の最古の遺跡は、宇治市野神50番地の丘陵端の弥生式時代の石鏃出土地<sup>1</sup>である。サヌカイト製の打製石鏃10数個のほか、小形の磨製石剣の破片も採集されている。伴出土器は不明である。

同じ丘陵地の南端部の宇治市広野町一里山でもサヌカイト製の打製石鏃数点が表面採集されている。亦、宇治市小倉の丘陵裾の微高地で、宇治市史編さんに伴う分布調査で弥生式後期の土器が発見されている。

古墳時代の遺跡は名木川の谷沿いに庵寺山古墳があり、谷口には金比羅山古

墳、坊主山古墳の一群があり、久津川古墳群の北辺の一支群を形成している。庵寺山古墳は大型円墳で内部主体は未調査であるが、直弧文を飾る靱形埴輪や蓋形埴輪<sup>2</sup>を出土した前期的古墳である。金比羅山古墳<sup>3</sup>は空濠と前庭をもつ大型円墳で、墳頂には2基の埋葬施設があり、第一塚からは二神二獣鏡、玉類、刀剣、農工具、櫛が検出されている。第二塚は埴輪製円筒棺を使用し、管玉、農工具が副葬されていた。墳丘裾には円筒埴輪列があり、これと同じ位置に4基の円筒埴輪を利用した埴輪円筒棺があった。400年を前後する時期と考えられている。

金比羅山古墳に隣接して北側に坊主山1号墳、同2号墳<sup>4</sup>が立地している。坊主山1号墳は全長45米の前方後円墳で、円筒埴輪列をめぐらし、埋葬施設は後円部中央にあつて、組合式木棺が使用されていた。棺内外より金製耳環・玉類・銅釧・鉄斧・三輪玉装大刀・鉄鏃・矛・銅鈴・馬具類・須恵器が検出されている。前方部にも埋葬施設があつたとみえ、須恵器が出土している。

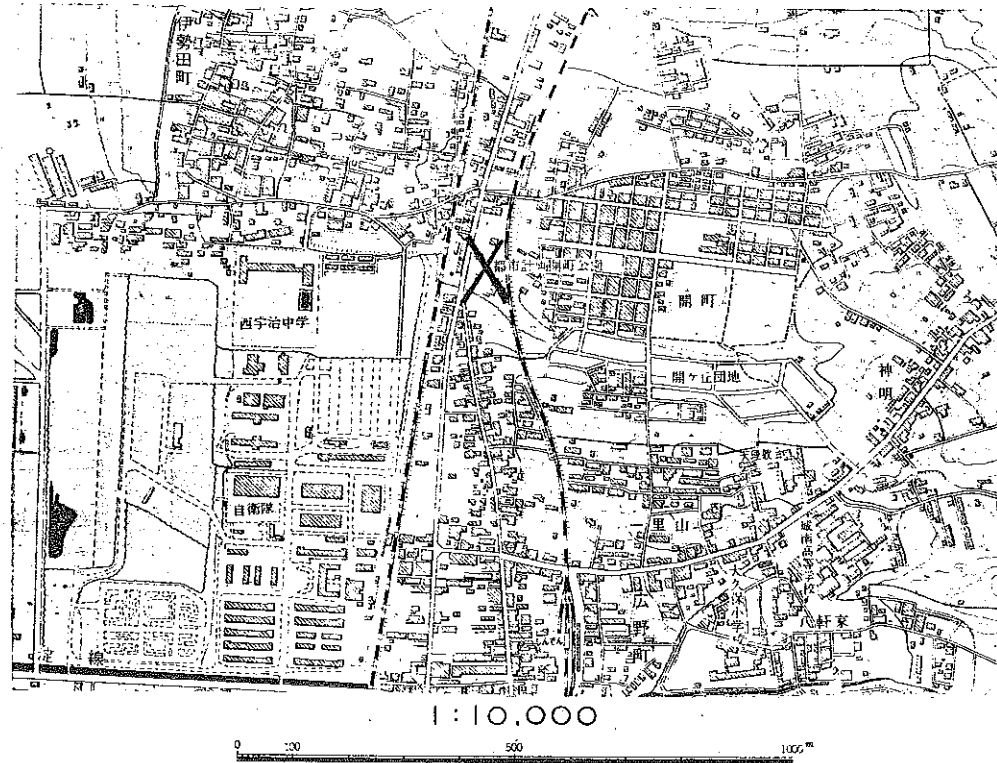
坊主山2号墳は1号墳の前方に立地する円墳であり、埋葬施設は東西に2ヶ所並んでいた。両施設とも組合式木棺に銅・鉄製耳環・鉄鏃・刀・須恵器等が出土しており、久津川古墳群では最も新しい古墳で、六世紀初頭から六世紀前半頃のものと思われる。

名木川の谷口の北側丘陵には一里山古墳<sup>5</sup>と称す円筒埴輪列をもった古墳があつたが、痕跡のみでその実体は不明である。

伊勢田町中山は洪積世の低台地より沖積平野に向って傾斜する処で、以前茶園であつた所より須恵器の蓋付高杯の破片が出土している<sup>6</sup>。蓋は口径12.1糎でツマミのあるもの、高杯は口径10.3糎の杯に短い脚がつき、長方形の透しがあけてある。焼成良好な第Ⅱ形式のものである。蓋と高杯がセットで出土していることは、六世紀初頭頃の埋葬遺跡の可能性が考えられる。

式内社の伊勢田神社の北東、若林16番地の旧茶園から須恵器一括が出土<sup>7</sup>している。遺構は不明である。須恵器は口径11.7糎の杯身1個と高さ17糎の長頸壺1個、この長頸壺の肩部には二条の沈線の窯印がつけられている。他に丸底の破片や叩目のある胴部の破片がある。いずれも第Ⅳ形式の七世紀代の須恵器である。戦時中国際航空KK（旧日国の前身。現大久保自衛隊）の工場建設の際に箱式棺的墓地群があつたが破壊されたと聞く。その実体は不明である。

遺跡・位置図



亦、国鉄新田駅の東側には川原寺式の軒丸瓦から奈良期の古瓦を出土する広野磨寺<sup>8</sup>が存在する。

かゝる考古学的環境の中に伊勢田塚は立地していた。

(註)

1. 山田良三「京都府宇治丘陵出土の石鏃」『古代学研究』58号 1970.
2. 京都大学所蔵
3. 『埋蔵文化財発掘調査概報』1965 京都府教育委員会
4. 全 上
5. 筆者実見
6. 史友会員 角田博一氏所蔵
7. 全 上
8. 城南高校地歴部で二度にわたり試掘調査を行なった。

## 第二章 調査経過

宇治市開町の遺跡はお亀塚などと呼ばれて、江戸時代の古い墓としての伝説があった。土地所有者の松井一夫氏は昭和12年頃、偶然に畑の中に陶棺が埋蔵しているのを発見したが、上記の関係遺物ではないかと思ひ、そのまゝ埋めもどした。その後畑として耕作されてきたが、戦後、こゝは孟宗の竹藪となった。

近時、国道沿いに住宅化が進み、遺跡の隣も互助センターの所有地となり、昭和47年になって松井氏の境界から50m離れて、鉄筋五階建のビルディングが計画され、浅沼組が工事を請負うことになった。この工事のために互助センターは松井氏の所有地を境界より13m借用し、深さ3m掘ってビルディングの基礎工事が行なわれることになった。

松井氏はこの工事に先立ち、先の遺物が埋蔵していることを思い出し、基礎工事にかゝるのではないかと思ひ、記憶にたより、1米四方の坪掘りをして、遺物の有無を確認した。

その結果、遺物は遺存しており、工事にかゝることが間違いないので、宇治

市伊勢田史友会に連絡した。

史友会では工事に先立って、会員の西宇治中学校教諭・中津川敬朗先生に調査を依頼した。一方、宇治市史編纂室杉本敬一室長にも連絡した。現場を下見した市史編纂室の諸氏は坪掘りされた試掘掘の底に見える遺物が陶棺らしいことを知り、筆者に確認を求めて来た。現場で観察したかぎりでは亀甲形の陶棺であり、江戸期の処刑場関係の遺物でないことが判明した。一先づ現場は現状のまゝ保存するため埋めもどし、事後の対策を打合せた。

伊勢田史友会は工事によって遺構・遺物が破壊されることのないよう、事前に発掘調査し、遺構を明らかにして郷土史の資料を得るため、宇治市教育委員会に共同調査を申入れた。

この遺跡を伊勢田塚と命名し、宇治市教育委員会と伊勢田史友会とによって伊勢田塚調査会を組織し、発掘調査担当者を筆者が承諾した。発掘調査に必要な諸手続をとり、諸般の事情により、調査会は昭和47年7月15日より7月21日まで発掘調査を実施した。

### 調査会組織

調査会長	向井正存	伊勢田史友会長
顧問	北島勇	宇治市教育長
調査担当者	山田良三	城南高校教諭(日本考古学協会員)
調査員	中津川敬朗	西宇治中学校教諭
	服部和一	宇治市教育委員会社会教育課
	増田一裕	花園大学史学科学生
調査参加者	伊勢田史友会員	
	城南高校地歴部	
	西宇治中学校郷土調査部	

## 調査日誌

7月15日（土）雨

本日で城南高校の期末テストが終り、今日から調査に取り組む予定であったが、一昨日の豪雨で臨時休校となり、テストが一日順延のため城南高校地歴部の参加は月曜からとなる。

今日も雨天で慰霊祭も明日に延期する。昼過ぎ市役所の車で城南高校より調査用具を現場に搬入し、野小屋に格納した。

7月16日（日）曇

午前9時より、向井会長の読経にて仏式の慰霊祭を行なう。史友会員、市教育委員会、宇治市史編さん室関係者の焼香が行なわれた。午前10時より作業を開始する。

史友会員と西宇治中学生により発掘予定地の孟宗竹を伐採し、遺跡付近の地形測量にかゝる。宇治市都市計画図に示す国道の標高33.00米を水準点として、25糎の等高線で100分の1の地形図を測量する。

午後より測量済の地点に、方位に沿って長さ8米、巾1米のトレンチ2本を設定し、表土をはぎにかゝる。竹の根の掘おこしには手を焼く。北トレンチ中央部には野ツボがあったらしく漆喰の破片が出土する。同トレンチの西側では攪乱層より陶棺の破片が若干出土した。地形的には東から西へ傾斜しているので、西端では表土の下層で赤土の地山が出た。

小倉小学校からテントを借用して、トレンチの上に張って日除けとした。5時過ぎ作業を終る。

7月17日（月）曇後雨

午前9時 作業開始、互助センターの工事で掘下げられた境界の壁面を清掃し、観察した結果、洪積層の赤土の地山に掘込まれた巾1.9米の墓壇の端を確認した。写真撮影し、壁面に露出する墓壇に沿ってトレンチを拡張し、掘下げる。午後より城南高校地歴部も調査に参加する。午後2時頃より雨が降りだし、作業を一時中止する。小雨の中でテントの下は作業を続行した。墓壇の北端を検出する。北トレンチの西端は北に向って深く傾斜するので、何らかの遺構とも思われる。注意しながら掘すゝめた。

読売新聞記者・木村氏取材に来場。

7月18日（火）晴

朝からトレンチ拡張部を精査し、墓壇の検出にかゝる。表土直下で長さ29米、巾1.6米の墓壇を確認する。しかし墓壇の北東、北西隅は共に既掘により攪乱されていた。確認された墓壇内の排土作業を行い陶棺の検出にかゝった。陶棺の蓋の部分は土圧により割れて身の部分に落込んでいた。陶棺の南端は既掘痕あり破片も取上げられている。北端も攪乱を受けていると観察した。

南北両トレンチは他に遺構の有無を調べるため発掘を続行する。北トレンチの中央部の墓壇の北東隅には野ツボの底部が埋没していた。北トレンチは地山に達す。西端の地山は弯曲し溝状になるが出土遺物もなく、遺構とは認められず、これ以上の追求はやめた。南トレンチは表土をはぎにかゝる。5時過ぎ作業を終了した。

7月19日（水）晴 猛暑

朝から陶棺の検出を続行するが、墓壇が狭く四人で作業するのが精一杯である。棺身に直交し、十文字状に巾15糎の壁を残し土層を見る。墓壇の底部を清掃する。墓壇底部は棺より15糎離れて二段に掘下げられていた。午後2時棺の検出を終り、写真撮影する。

実測用の水系を張る。水系の高さは32.49米として陶棺の出土状態の実測を行う。実測記入済の破片は順次取上げた。

地形測量の平面図に水系のポイントと各トレンチを記入する。

南トレンチは表土をはぎ観察するも遺構らしきものなく、これ以上の追求はやめる。

服部和一氏は現場保持のためキャンプ用テントにて夜警のため泊る。

中野市教委教育次長、古川社会教育課長、市史編纂室長杉本氏、京都大学中村徹也氏、広瀬和夫氏、新聞各社記者来場。

7月20日（木）晴 猛暑

今日も朝から暑い。テントのおかげで助かる。棺内の排土を行い清掃し、蓋、棺身側壁破片の落込み状態を出し、写真撮影する。実測と平行して棺内落込みの破片は取上げてゆく。

棺南端の内部に犬の埋葬があって、首輪・鎖と共に骨片が出土した。これと関連するのが棺身南側壁に接して木の杭が打込まれており棺は粉々に割れていた。棺内中央部には側壁や蓋の一部と思われる大形破片が落込んでいた。

午後より棺底の清掃にかゝる。棺南端の犬の埋葬跡の下は赤土の地山であった。中央部の棺底は大形破片の下を北端から攪乱されており、現代使用の平瓦が混入していた。陶棺は棺底も脚もなく、地山の上に棺身をすえるものである。棺底部を精査するも副葬品の一点も検出することが出来なかった。清掃後の棺内を写真撮影した。

棺身側壁は残っているがヒビ割れが多く、取上げの際に殆んど割れた。取上げ終了後、棺台の地山を観察し、午後7時前に作業を終る。借用のテントを小倉小学校に返却する。史友会員と反省会を持つ。

毎日、読売新聞記者、市教委教育次長、京都大学中村徹也氏来場。

7月21日（金）晴

午前9時よりトレンチと墓壇の埋めもどしにかゝる。実測に使用したポイントは現状のまま保存し、埋めもどす。午前中にて作業はすべて完了した。出土遺物と調査用具を中津川先生の乗用車と市役所の車で、城南高校社会科準備室に運び格納する。

昼食後、地歴部にて今後の出土遺物の整理について打合わせする。段ボールに納めた遺物を準備室でひろげて陰干しにて解散した。

城南高校地歴部員は夏休み中も登校し、陶棺の破片を洗浄した。九月に入り、放課後を利用し、破片を接合し、復原を行なう。欠失した部分は石膏で補修した。10月10日の城南高校文化祭までに復原を完了して展示した。

復原の結果は亀甲形の陶棺ではなく、四注式家形の陶棺であった。亦、南半部の陶棺は半截されていたことも判明した。

復原された陶棺は宇治市伊勢田町のポーマン美術装飾株式会社で復原の仕上げをもらった。

復原作業に終始協力した花園大学学生増田一裕氏、およびポーマン美術装飾株式会社に記して謝意を表す。

### 第三章 遺跡と出土遺物

#### 外 形

遺跡は東端の標高33.25米から西端の32.50米と東から西へ僅かな傾斜をみる。かつてはこの付近は畑作地であったが、戦後、孟宗竹の竹林に切替えられた。従って平坦な地形をなし、外形から観察したかぎり、或は地形測量による実測図からは古墳としての墳丘があったかは明らかでない。

しかし、復原された陶棺の高さからすれば現地表では露出してしまい、棺が完全に復原できるぐらい遺存がよかったことからみれば、或る程度の盛土があったのではないかと思われる。

#### 内部構造

地表下約30糎は黒褐色の耕作等による腐植土層であった。耕作土層の直下で墓壇の掘方がみつかった。北東部には野ツボの底が埋没しており、このための既掘で攪乱されていたが、主軸方向は北東から南西を向く。巾は上縁で15米、下底で1.3米あり、長さは南端が工事で切取られていたが約3米、下底で26米の墓壇が検出された。現在する墓壇底は地表下70糎の深さであった。墓壇底は更に巾約1米、長さ1.8米、深さ10糎と二段に掘くぼめられていた。二段に掘下げた中央には地山を削り出して高さ10糎の棺台をつくり、棺台の高さは二段目の高さと同じであった。従って棺台をつくるため、墓壇底に巾約15糎、深さ10糎の溝を掘りめぐらして棺台を削りだすものである。

この棺台の上に陶棺を安置する陶棺直葬の埋葬遺構である。

陶棺は後述の通り蓋と身は共作りで、前後二つに分離するものであったが、北側の棺身は合口のメス型で、南の棺身と印籠口に合さるものである。南の棺身は途中で切断されて短くなっており、合口の切取られた部分を南の棺身の外側に覆って二重にし、遺骸を保護していた。従って埋葬時の棺の長さは北側が98糎、南側が約50糎、全長約1.5米であった。

棺身を破片で覆った南半部の外側には合口した棺のほぼ真中まで灰白色の粘土が検出された。棺の北半部には粘土の痕跡がなく、南半部のみ粘土を貼ったものと思う。



検出された遺構から埋葬時を復原すると、墓壇底に巾15糎の溝を掘りめぐらして棺台を造り出し、更に棺台を陶棺の厚さだけ削って棺の安定をよくし、この棺台の上に遺骸を安置し、南側の半截した棺を被せ、続いて北の棺身を被せて合口とし、更に南棺には切断した棺片で覆って二重に被覆し、その外側の棺身下部に灰白色粘土を南半部のみに貼りつけて目貼りとした。而して墓壇をうめもどしたと推察する。

棺の内外からは副葬品の一片も検出することができなかった。

#### 陶 棺

棺身は殆んど遺存しており、破碎された蓋も或る程度残っていたので、長時間の接合復原によって、欠失した部分を除き完全に復原することができた。

棺は蓋と身を共作りにした前後二つの合口式になるもので、形式的には四注式屋根形の陶棺である。しかし通常の陶棺と異り棺底も脚も無い特殊な陶棺である。

北棺は長さ98糎、高さ63糎、側壁即ち身の高さは北端で44糎、合口の処で40糎と低くなる。合口の部分は巾6糎の縁取りをし、内側は5糎の抉り込みをなす印籠口になる。棺身の側壁底はヘラで整形されており、その最初から底無に作られていたものである。

南棺は南端から55糎の棺中央で切断され、半截した南半部のみ使用していたが、破片を接合し、復原した結果、長さ107糎、高さ60糎、棺身側壁の高さは合口の処で40糎、南端は35糎と低くなる。合口の部分は巾10糎縁取りし、こゝにつく凸帯はいづれも外側を削って印籠口になるように加工している。

両棺を合口にした全長は202糎となる。

屋根も側壁も亀甲形陶棺にみられるような凸帯が格子状に貼付けられている。屋根の部分の五本の凸帯は両端に向かって弯曲しており、亀甲形陶棺の影響を受けているとみられる。

側壁は屋根の部分より凸帯の数が一本少ないものである。

## 第四章 総 括

1. 墳丘の有無は現地形からは明らかにすることができないが、復原された陶棺と墓壇底の深さから推察すると、多少の封土があったとみななければならない。

2. 伊勢田塚の四注式家形土師質陶棺に最も近いのは京都府城陽市青谷出土<sup>1</sup>の陶棺であるが、寄棟の妻がやゝ扁平で凸帯も方格になり多少異なる。勿論有脚のものである。

無底、無脚の例は齊藤和夫、森 浩一両氏によって、214例の出土地名表<sup>2</sup>が紹介されているが、その中で茨城県東茨城郡川根村木部出土の1例のみである。

3. 小江慶雄氏<sup>3</sup>は、(1)封土の中に直葬されている陶棺は亀甲形土師質のもの、(2)堅穴式石室におさめている陶棺には亀甲形土師質のもの、切妻式家形土師質のものとの両者がある。(3)横穴式石室におさめている陶棺には亀甲形土師質のもの、四注式家形須恵質のもの。と三類型に分類し、直葬形式は古い墓制の伝統が継承されているという見地に立てば、第一類型の亀甲形土師質のものが初現形式に属するとみている。

亀甲形土師質陶棺の凸帯を中期古墳の埴製円筒棺の影響とみれば、埴製円筒棺の先行形式は埴輪円筒棺で、すでに奈良県新沢千塚500号墳<sup>4</sup>の前方部で出土しており、前期古墳にその初現をみる。

京都府金比羅山古墳<sup>5</sup>の第二主体部は埴製円筒棺からなり、墳丘裾には埴輪円筒棺数基が存在していた。金比羅山古墳は五世紀初頭頃と思われる。埴製円筒棺より亀甲形土師質陶棺への移行は家形石棺の影響を受ける以前にとゞのい、家形石棺の影響を受けて四注式家形陶棺が出現したと仮定すれば、伊勢田塚の陶棺は亀甲形から四注式家形への移行期の間形式である。

陶棺直葬の埋葬遺構も横穴式石室に先行する墓制の伝統が継承されたものと仮定すれば、陶棺の形式と相まって、古墳時代末期ではあるが、京都府乙訓郡向日町の一古墳出土の四注式家形須恵質陶棺、大阪府豊中市野畑太古塚古墳<sup>7</sup>出土の四注式家形須恵質陶棺よりは古く、奈良市歌姫町赤井谷の横穴<sup>8</sup>出土の亀甲形陶棺よりは新しいと思われる。歌姫からは金銅製耳環、鹿角装把

刀子，須恵器，土師器が副葬されていた。須恵器は第Ⅲ形式に属すもので、六世紀後半頃に考えられる。この歌姫の陶棺からみると伊勢田塚の陶棺は形式的に新しく七世紀初頭から前半頃に推察されるが、確実な年代を決定するには今後の陶棺の形式編年に待たなければならない。

4. 陶棺は岡山県の美作，備前地方から兵庫県の播磨西部にかけて分布は濃密で、これに次いで畿内地方に多く分布する。岡山県佐良山古墳群では約170基のうち6分の1以上に陶棺がみられるといわれる<sup>9</sup>。

陶棺の製作はその手法，焼成，技術の点から当然専門の工人の手になったといえよう。大阪府豊能郡桜井谷村新池，蛇池付近の窯址<sup>10</sup>で四注式家形陶棺が，大阪府泉北郡西陶器村田園の窯址<sup>11</sup>でも陶棺片が出土しており，陶棺埋葬の被葬者を窯業生産と関係深い集団と関連させて考慮される。

奈良盆地に於ける陶棺出土の5分の3は北部に集中している。これに対し京都盆地では18例が知られるが，その3分の1が長岡京市に集中している。亦，半数は乙訓地方にある。しかし，一応は普遍的に分布している。

山城の場合は窯業生産との関連は厳密には肯定できない。特に伊勢田塚の陶棺は底部がなく，しかもその使用にあたっては半截し，縮めている。このことは既製の陶棺利用と考えられる。底無しの陶棺は簡略化されたものであろうし，副葬品皆無とあわせて被葬者の地位は余り高くなかったのではなからうか。城陽市尼塚五号墳<sup>12</sup>は和銅開珎を出土した奈良期の古墓で時期的には降下するが，壁面の石をそろえた石室が使用され，小墳丘を持っていることは陶棺の被葬者との間で身分の相違がうかがえる。（1972.12.6）

註)

1. 小江慶雄「京都府久世郡城陽町青谷出土の陶棺について」『京都学芸大学学報』A2 昭和27年
2. 齊藤和夫，森 浩一「日本陶棺地名表」『古代学研究』1 昭和24年
3. 小江慶雄「陶棺考」『京都学芸大学紀要』A25 昭和39年
4. 樞原考古学研究所編「大和新沢千塚」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第17輯，昭和38年
5. 「金比羅山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1965.

6. 註3に同じ

7. 小林行雄『日本考古学概説』

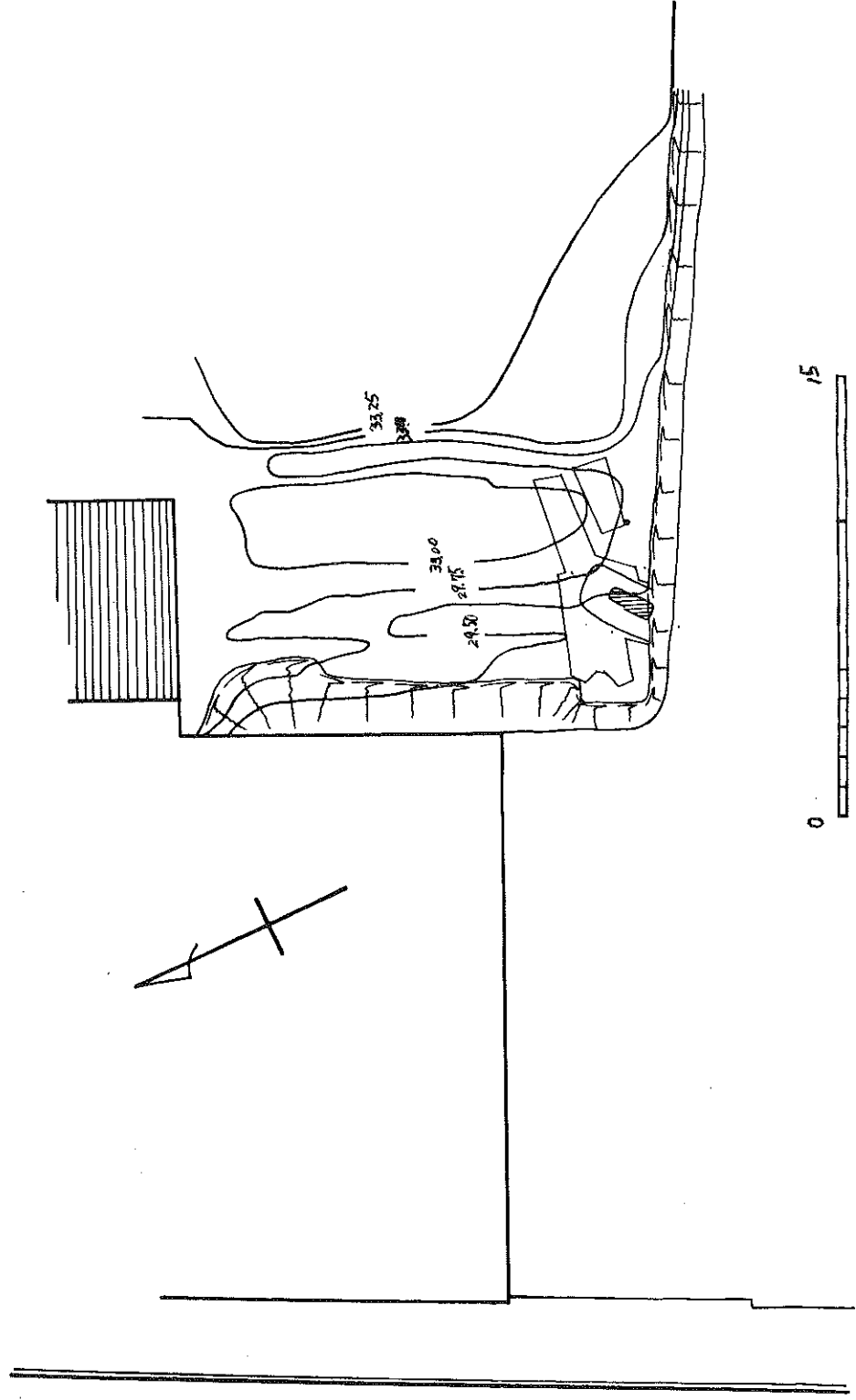
8. 小島俊次，北野耕平「奈良市歌姫町横穴」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』 第12輯，昭和34年

9. 大塚初重「古墳の変遷」『日本の考古学』 IV

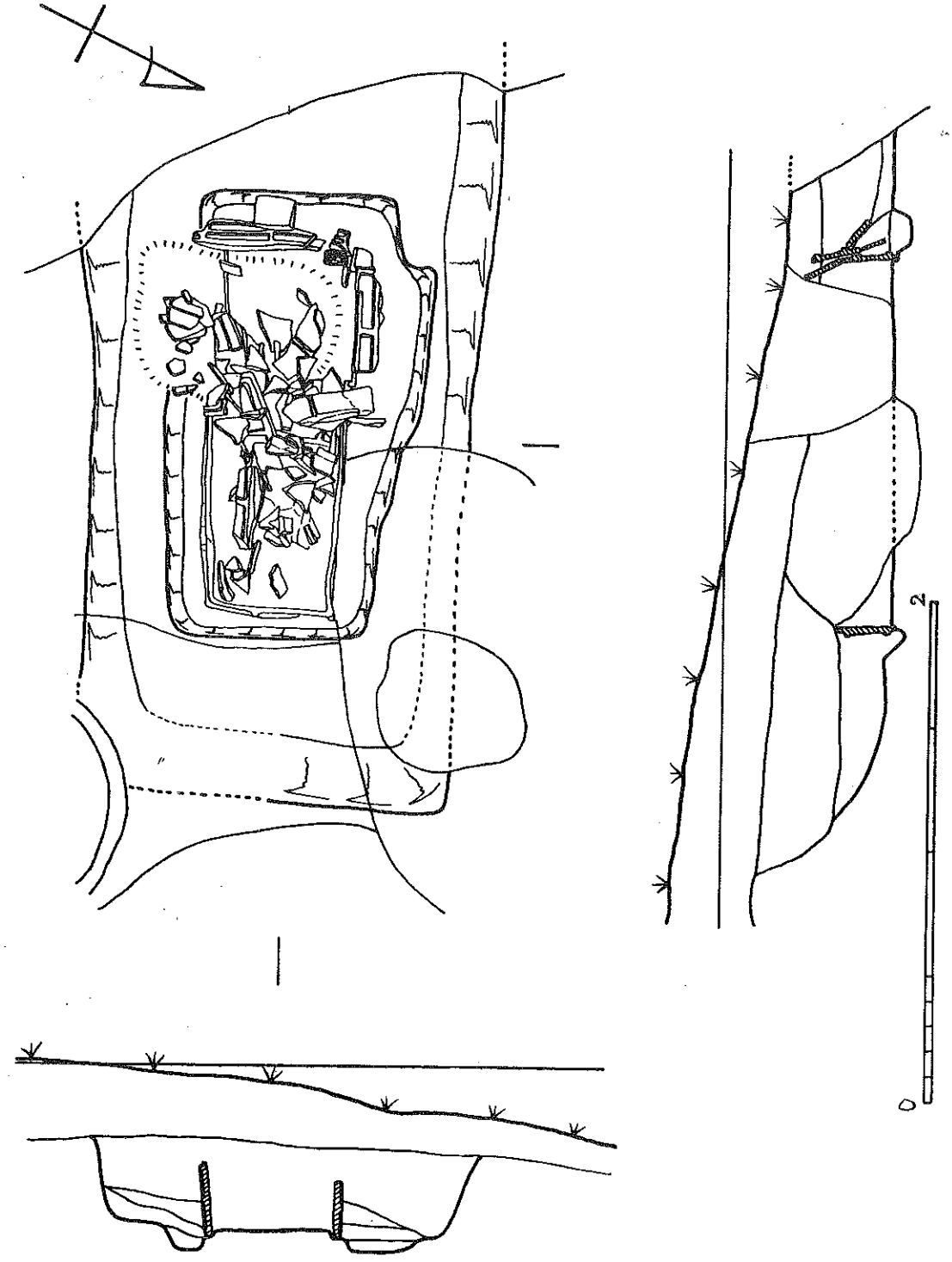
10. 『考古学雑誌』 5ノ11

11. 註2に同じ

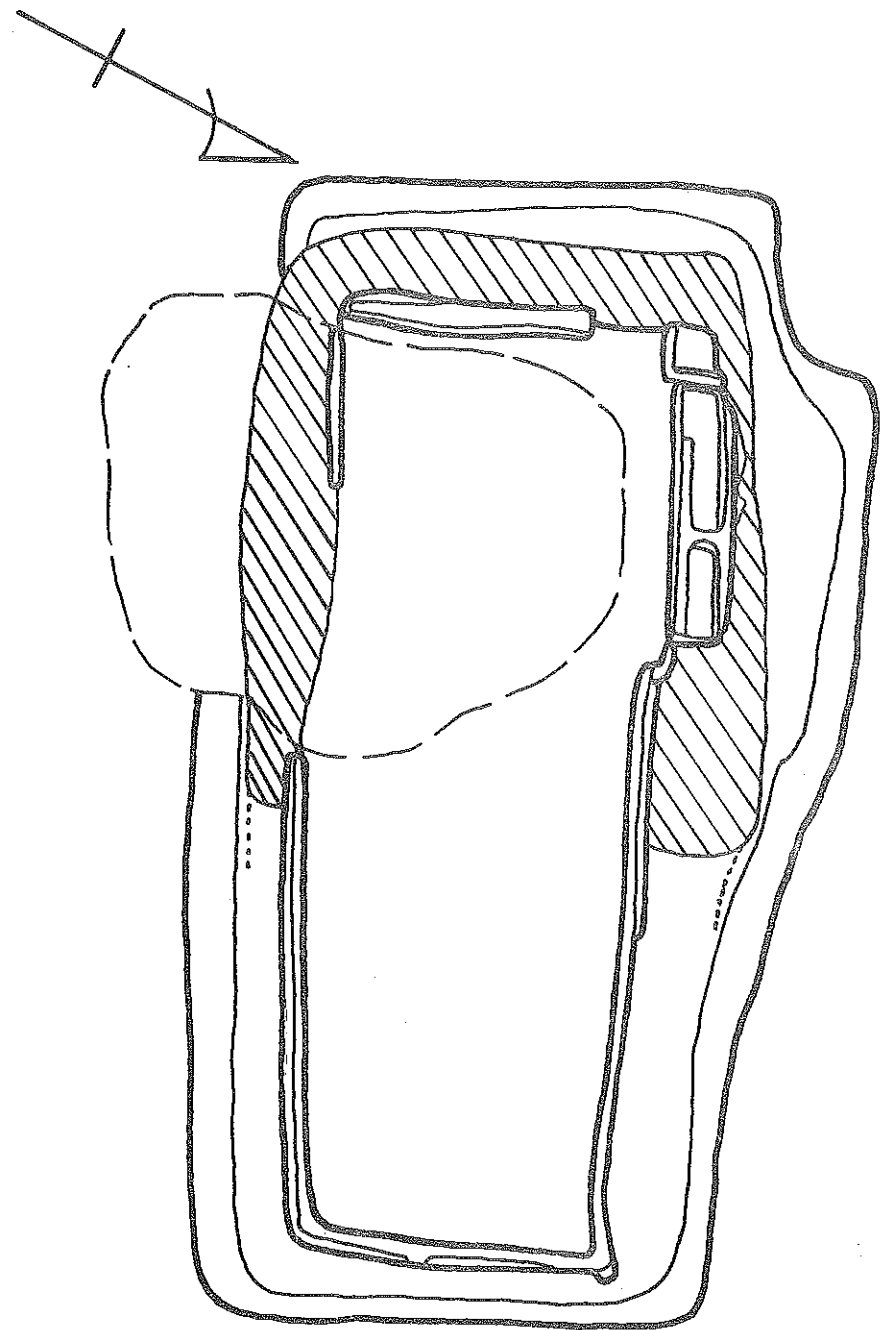
12. 「尼塚古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1969.



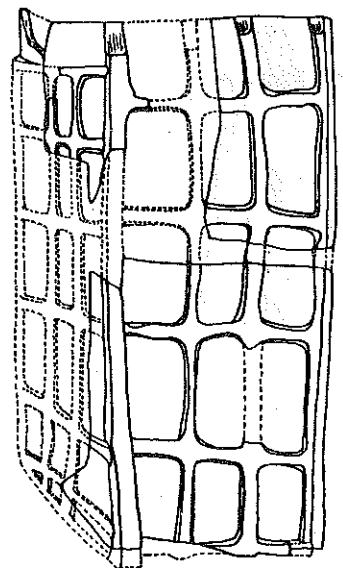
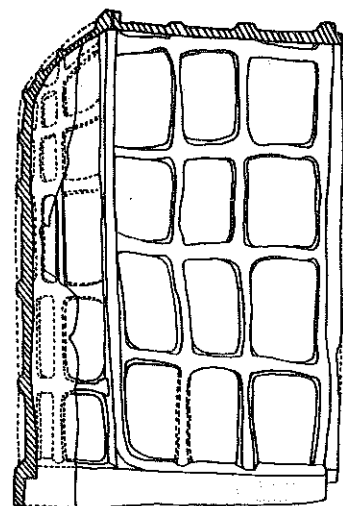
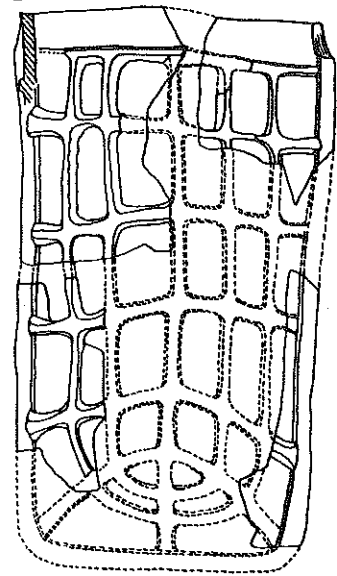
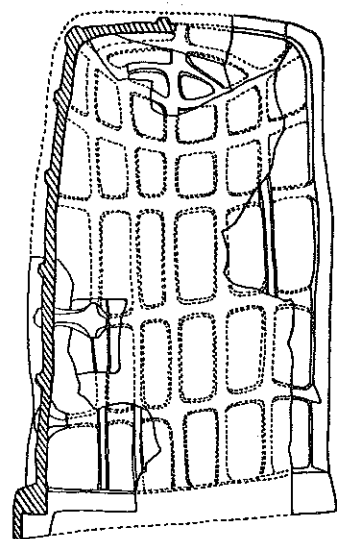
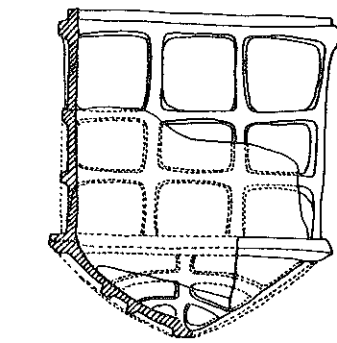
《地形实测图》



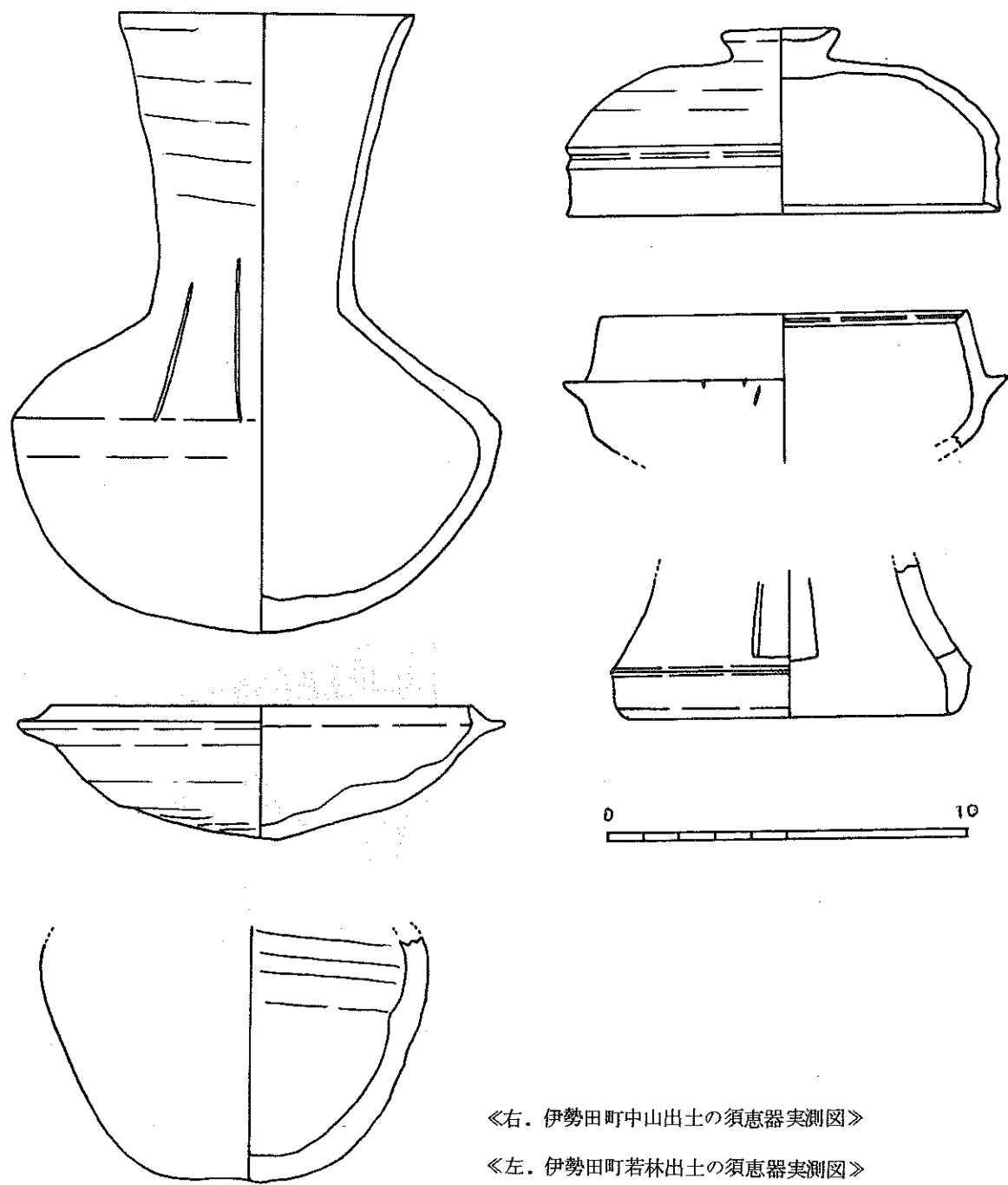
《主体部实测图》



《墓坛底实测图》



《陶棺实测图》



《右. 伊勢田町中山出土の須恵器実測図》

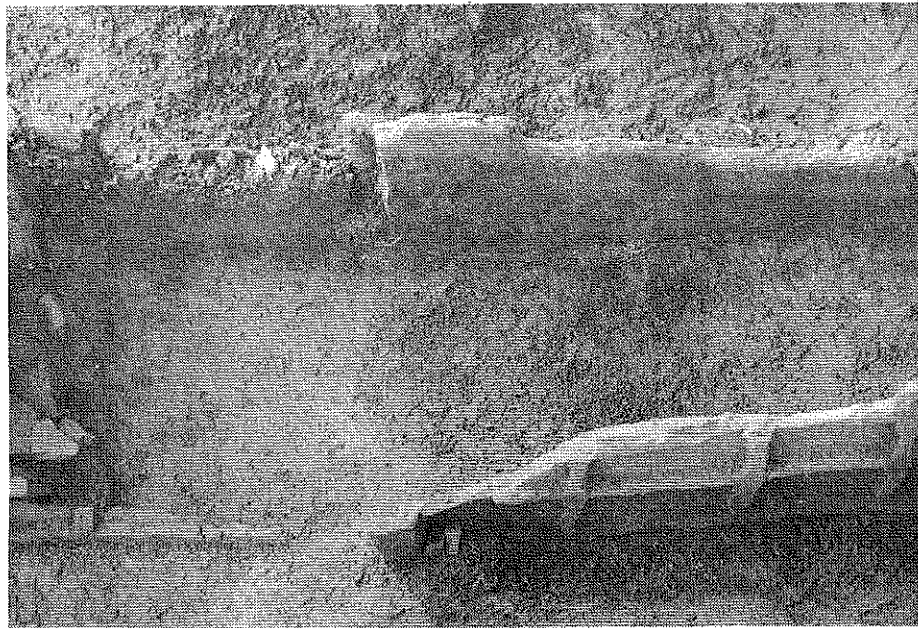
《左. 伊勢田町若林出土の須恵器実測図》



遺跡・全景



陶棺出土状況



陶棺と棺台



陶棺

## 陶棺の歴史的背景

北川 純三

<はじめに>

陶棺の出土した伊勢田塚は、前述の報告書に記述されている宇治市開町九番地に位置するが、古くは行政上からも伊勢田村の一部であり伊勢田集落としての生活圏の一角にあった。

今回の調査で期待された伊勢田集落の歴史の一端が明かになり、陶棺の考古学的考察によって6世紀から7世紀頃のものであることが明かになり、かつ今回の調査にまつわって中山や若林の旧茶畑から出土の土器片が須恵器であることが明かになり、さらに今回は明かにされなかったが、旧小倉村と伊勢田村の村界にある「石のからと」と古老がいゝつたえる古墳跡もあり<sup>①</sup>、さらに伊勢田の自然条件や地理的条件よりみた集落としての古い開発を指摘されている<sup>②</sup>ことも明かになったものと考えられる。

ここで、さらに二・三の問題点をあげて陶棺の歴史的背景を考えてみよう。

### (1) 条里遺制と集落形成

現在もなお古老がいゝ伝えている通称の地名に次のような呼び名がある。

「六の坪」「八の坪」「十二の堤防」「十八」「三五田」。これらの土地は伊勢田集落の西にひろがる水田の通称名で、現在は宅地化への造成が進められていて、既に新地名でよんでいる。しかし、これらの土地は明かに大化改新以後の土地制度確立のための地割によるものである。

巨椋池干拓誌の中で京都大学の吉田敬市先生が論考され、新しくは「平野の開発」の中で谷岡武雄先生もふれておられるところであるが、さらに地理的な面から考えてみよう。

伊勢田集落の北方に大池（巨椋池の土地の一般的な呼び方）といわれ、山城湖盆の姿をとどめた巨椋池は、長い年月に宇治川や木津川の流水によって次第に狭められ、特に地質的特質のある木津川のもたらす砂礫によって木津川流域の平野開発は、さらには巨椋池周辺に開発がすすめられたと考えられている。<sup>③</sup> ことに木津川の東麓は、南から北に連なる低丘陵の台地からなり、北は宇治川の南岸に及んでいるが、この低い台地の北端にあたり、東の低台

地から西の沖積層への傾斜変換線上に位置している伊勢田集落は、低台地からの流水は、西流して集落をよこぎって一部は飲料水となり、また灌漑用水となってさらに北に流れて巨椋池にそゞいでいる。また、そのほかの小さな谷川は、集落の西において南北に通じる流路をとり、それにとまなう砂礫の流入は、おのずと自然堤防を形成し、(この一部を十二の堤防とよんでいる)あるときは天井川として灌漑用水路の役割をはたしたと考えられる。また時には氾濫して農耕地を荒すこともあり、(先にあげた地名のほか「中の荒」「砂田」など)そしてまた巨椋池が自然の猛威をふるい開拓された農耕地を浸すこともあった。(浮面という地名がある)しかし、これらの自然的条件と地理的な条件は原始的初期水田耕作地として好条件のもとにあったと考えられる。このようにして農耕集落の発生をみたと考えられる。最近小倉の南部で弥生式遺物の出土が確認されていることから関連して考えられるのである。

早く開発のすんだ水田耕作地は、班田収授法による土地制度の施行に組み入れられることも当然といえよう。そして畿内地方としてはことに早く開発がすんだであろうと考えられる。

## (2) 式内社伊勢田神社と氏子

山城風土記逸文にみえる「伊勢田の社」の記事によって知られる伊勢田神社は、その創建は古代にさかのぼりうると考える。また廷喜式式内社としての社格をもち由緒ある社である。風土記によれば「祇社」で祭神は、「大歳御祖命の御子、八柱」を合祀しているとある。大歳御祖命は穀神でしかも祇社であることから考えると先にこの地を開拓し農耕生活の始まった集落の人々の自然神信仰に発すると考えてよく、それを産土神として信仰し、祖先神を合祀し、氏神として成立し発展することは考えられることである。現在は三社を一地域に合祀して伊勢田神社としているが、土地の古老の伝えるところによると、現在地以外、集落の四至に社があったといい、現在の伊勢田神社は集落の東北の隅に鎮座するが明治初年まで西北の隅に作田神社があり、現在その社地は消えたが、その遺跡と伝えられるところは知られている。そしてこの神社のお祭は春一月十二日で、村人が当日には、北と南の組にわか

れて綱引き行事を行って、その年の豊作を占ったという話をつたえている。このことを考えると農耕生活を中心とした集落の姿が思われるのである。また今回の伊勢田塚調査によって現在の伊勢田神社の旧社域から須恵器破片の出土をみたのも祭祀遺跡を考えさせるものである。

## (3) 名木河作歌(万葉集)と那紀郷

有名な万葉集に「名木河」<sup>④</sup>作歌が五首ある。名木河については、その地理的な論考も幾つかある。通説としては現在の広野川が往古栗隈野から西に流れ、巨椋池に向って北流し巨椋池にそゞいでいたことは確かである。しかし土地の古老は最近までその景観を一部とどめていた山川を名木河といつたえている。先に条里遺制でのべた十二の堤防より村落に近く、通称「うちの田」と称している水田には、かつての巨椋池の増水期には堤防の役割をし、一方では天井川としてそれらの水田の灌漑用水路としての役割をしていた。近年広野川の流路が大きく変えられたので、原形の流路をたどることは困難であるが、少くとも今の広野川が真西に流れていなくて北西方向に流れていたことはたしかである。そしてこの作歌が名木河々口を旅したときの歌と思われる、万葉集研究の奥野健治氏の万葉山城誌によると、その歌の配列は、鶯坂作歌のつぎに集録され、ついで宇治作歌となっているから、和名抄の郷名による久世郡と宇治郷の間に那紀郷があり、那紀郷が名木河の河口であるとし、且つ、「小倉村伊勢田の辺たるべし」としている。また山城誌によると「広野溪、源自広野、東至伊勢田、曰那紀川、入大池」ともあることから考えられている。

このことから考えるならば、(1)(2)と関連して万葉歌の作者は、那紀郷という行政的地名を既に知っていたこととなり、奈良中期の交通路上に位置する集落として発展していたと考えられる。

## (4) 奴婢貢進と那紀里

東大寺文書<sup>⑤</sup>の中の天平勝宝年間(孝謙帝・749~756)に「大宅朝臣可是麻呂の貢賤文書案、山城国司移案、大養徳国司」がある。この記録によると「奴・麻呂年六十」、ほか十一人を久世郡那紀里戸主水尾公真熊戸口より東

## 庵寺山古墳実測調査

京都府立城南高等学校地歴部

部長 岩崎 恭典

大寺に貢進していることがみえる。孝謙帝の天平勝宝年間、聖武帝によって発願された盧舎那仏鑄造が完成して、その開眼供養の法会（天平勝宝四年、752年）が盛大に行われた時期である。そのときに久世郡那紀里の戸主水尾公が、その一族から11人の奴婢を貢進していることである。すなわち律令制における郷戸主である戸主は、行政的には里を構成する一豪族であり、里の中核的地位をしめる豪族である。かつ大家族制であったから11人の奴婢を貢進し得たと思われる。また水尾公（キミ）の公は「君」の意味をもつものと考えれば氏姓制度の「姓」を称した豪族であり、奈良期以前よりのこの地の豪族でもあったと考えてよいと思う。かように有力な豪族を戸主とする郷戸であるがために、当時において地理的にも奈良に近く、奈良の朝廷との関係や東大寺との関係もより密接に結びあい、そしてその関係の維持にもつながることで貢進したと考えられるのである。またこれと同じ頃、綴喜郡甲作里、山本里、乙訓郡山崎里、羽束里の地名もみえ奴婢を貢進していることがみえる。

<おわりに>

このように文献上いくつかの歴史的背景をみたのであるが、結論には、ほど遠いものである。しかし先にのべた洪積層と沖積層の傾斜変換線上に位置し湧水の豊かさ、そして農耕地としての湖盆周辺という自然条件も併せ考えると、農耕集落の早い発達が考えられなければならない。そして奈良期の早い時期に行政的でも注目され、奈良期以前には農耕集落としての位置が確認されたと考えられる。このような状況におけるこの集落の開拓者の有力な豪族の1人の墳墓とみるべきであろう。

（註）

1. 筆者現認、現在小倉町西山労銀住宅地内にある。
2. 谷岡武雄著 平野の開発第一章第一節
3. 同上
4. 万葉集巻九 1696. 1697. 1698. 1688. 1689.
5. 東大寺東南院文書第五櫃第七巻
6. 和名類聚抄郷名考証（池辺弥）及び(5)に同じ。

はじめに

京都南部の宇治市から城陽市にかけては人口の急増地域で、無計画な宅地造成により幾多の遺跡がその犠牲となっている。城南高校の裏山にある庵寺山古墳の周辺も都市化現象により日々変貌しつつある。

庵寺山古墳は昭和19年頃、京都大学の梅原末治博士によって調査され、直弧文の装飾ある靱形埴輪、蓋形埴輪等が検出されている。主体部は未調査の古墳である。

私達の地歴部はクラブ活動の一つとして冬休みを利用し、庵寺山古墳の測量を実施した。その際の観察による現況と実測図を報告し、同古墳の保存と研究に益するところがあれば幸に思います。

位置

行政上は宇治市広野町丸山で、城南高等学校の東南に存在する。古墳は南の名木川の谷と北の通称三軒屋谷とにはさまれた東から西へのびる丘陵尾根上のやゝ北寄りに立地する。

古墳の墳頂は標高75.80米の三角点となっている。

現状

墳丘の周辺および墳丘の南から東斜面は竹林となり、墳丘の北斜面および墳頂部は雑木と竹が入り混じっている。墳丘の西斜面は墳頂より約2米下がった付近まで竹林育成のため土取りで削除されて、高さ約45米の急崖となっている。

この急崖は二つの部分に分かれ、北寄りの四分の一は草木が生えてかなり古く、南寄りの四分の三は前者を切っており土の膚が露出してやゝ新しく思われる。この崖の下には江戸中期の古墓があり、これより以前に墳丘は削りはじめられたと思われる。



墳丘の東北から東南にかけての墳丘裾は竹林の育成や家の壁土用に採土されて1米から2米の崖となっている。墳丘の北側もまた数年前の宅地造成の際に削除されて3米から5米の垂直な急崖となっている。

#### 周 濠

比較的地形の変化を受けていない墳丘裾の南側には窪地が残っている。この窪地は墳丘の裾に沿って東西にのび、両端は竹林の土入れによって途切れている。また、東側にも窪地が残る、微低地が南北にのびている。南東部および墳丘の西側は墳丘裾を削って埋めたらしく外観からは観察することはできない。北側は該当する位置が宅地造成で切りとられ崖をなしているが、崖の断面には濠らしきものがみられる。しかし、この付近はすでに尾根筋から斜面上に入っているので、濠かどうかは疑問が残る。また濠が水濠であれば崖にその痕跡をとどめることゝ思われるが、それも不明である。

墳丘裾の東と南の地形的観察より幅約15米の空濠がめぐっていたと思われる。

#### 墳 丘

墳丘は実測図でみる通り、標高7330米から7280米にかけて等高線の間隔が開いている。また、7180米前後付近も等高線の間隔が若干開き、東南隅ではこゝより下が方形らしい地形になり、濠跡も弧を描かず直線状になっている。従って外観からは一辺約40米の方形基壇の上に径約26米の円形の墳丘がのり、高さ約65米の二段内至は三段築成の墳丘と考える。

#### 埴 輪

この古墳より靱・蓋の埴輪が出土しているのは有名であるが、実測の際も盗掘埴輪の周辺、墳丘の北の崖の最上部、墳丘の西の崖ぞいなど各所に円筒埴輪片が散布していた。こゝの円筒埴輪の特徴は凸帯の所謂タガが少し細いつくりである。なかには鎧の草摺の破片と思われるものもみられた。北側の宅地造成の際に西寄りの所から壺が出土したとの話があるが、多分埴輪類ではないかと思われる。亦、墳丘西斜面の崖面ではごく微量の朱が露出していたとも聞いている。

#### 盗 掘 埴

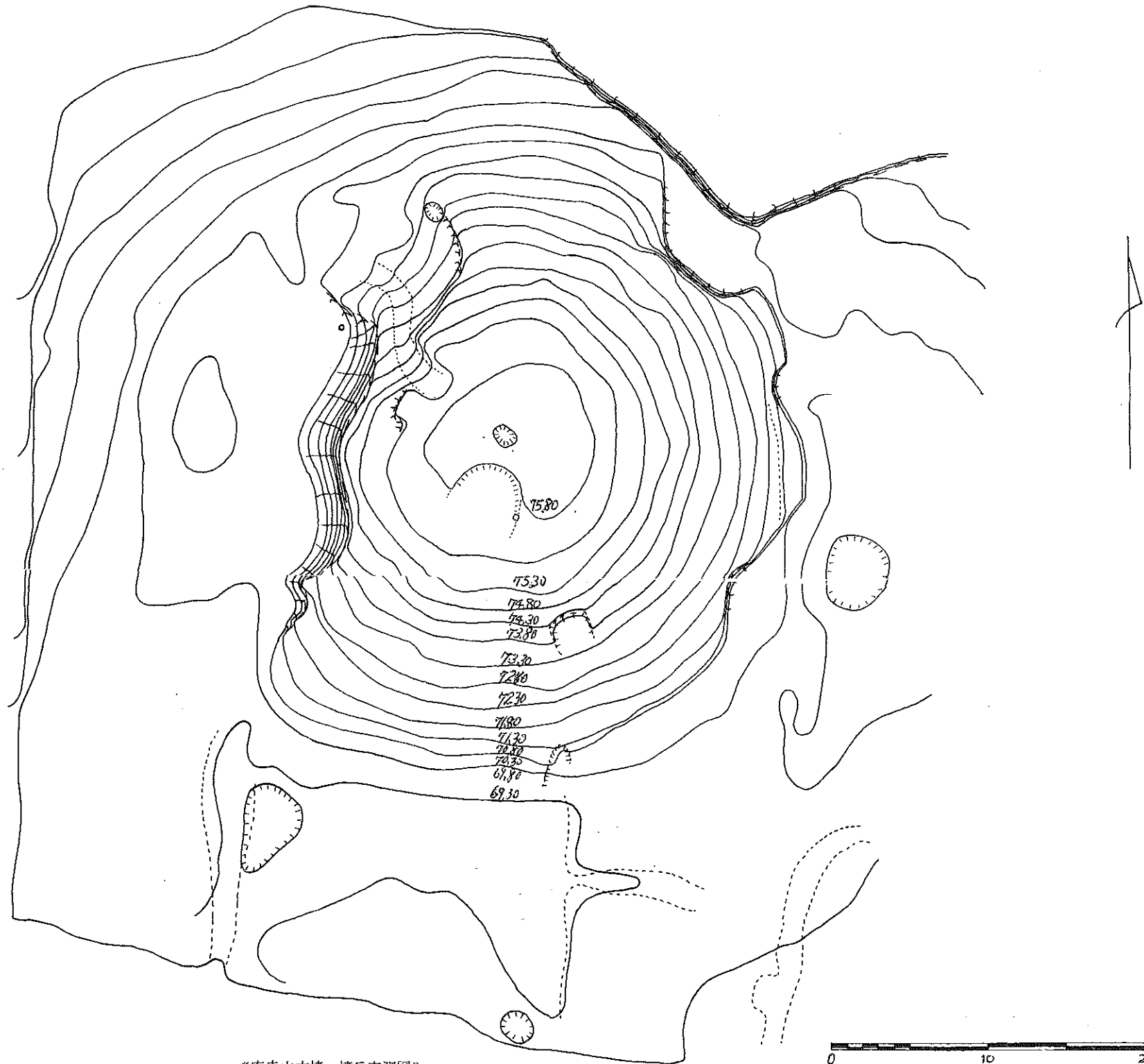
墳丘の墳頂中央には、数年前より径約15米の盗掘埴輪があげられており、その底はかなり深く、粘土層にまで達している。盗掘埴輪の内部には円筒埴輪の破片が投げこまれているのがみえる。

#### 近 世 遺 物

墳頂部に1基と墳丘西の崖下に1基の古墓があり、墓石がたっている。いずれも刻文は明瞭であり、江戸期のものと思われる。この墓石に刻まれた戒名等は凡人と違い、僧侶、尼僧の類のものではないかと思われる。また墳丘裾の西南には五輪塔の火輪と思われる花崗岩製のものがころがっている。

いずれも古墳の北側の三軒屋谷には、庵寺山古墳の名称の由来となった庵寺が存在したというので、その関係の遺物ではないかと思う。

(1973. 2. 10 小笠原義治)



《庵寺山古墳. 墳丘実測図》

伊勢田塚調査報告書

昭和 48 年 4~~8~~. 9. 日 発行

編集・発行 宇治市教育委員会

.....  
成 文 社

印刷所 宇治市宇治下居 31

TEL ㊤ 2509